

南極OB会 会報

No. 36

発行 南極 OB 会
編集 会長 国分 征
広報委員会

今号の主な内容

- 新年のご挨拶 ○昭和基地から新年のメッセージ ○第 60 次観測隊の壮行会開催
- 南極 OB 会 60 次隊壮途記念講演「60 年目の南極観測」
- 第 27 回「南極の歴史」講話会の概要
- 話題：○初代南極観測船「宗谷」竣工 80 周年記念アマチュア無線局
- 囲碁同好会の活動について ○南極倶楽部「山の会」で日和田山へ
- 南極関連情報 ○隊次報告 (9、13、20、24、26、27、30 次)
- 新刊紹介「南極点ー夢に挑み続けた男 村山雅美ー」、
「犬ぞり探検家が見た！ふしぎな北極のせかい」
- 会員の広場 ○広報委員会からのお知らせ

2019 年 新年のご挨拶

南極 OB 会会長 国分 征



昨年 12 月 19 日は極点到達 50 周年記念日であった。会報「帰国後の各隊の動き」には、こうした歴史を反映して、それぞれの隊の会合報告として 40、30、25 周年といった言葉が並ぶようになっている。観測隊は 60 次となり、半世紀を超える歴史を積み重ねてきたわけだが、ここでは、夏隊に帯同する教員によって行われている南極授業プロジェクトについて喚起したい。

南極授業プロジェクトは、51 次隊からスタートし、60 次の派遣により 10 周年を迎える。「南極を教育に」を掲げた南極授業プロジェクトの実現までの経緯については、本吉 51 次隊観測隊長によって報告されている (会報 No.10)。このプロジェクトは、現職の教員を南極に派遣して、現地から南極授業を行う、それによって南極観測に対する国民の理解や関心を高めるだけでなく、未来を担う次世代の人材の育成にも寄与することをねらいとするものである。これまでの派遣教員の報告は、全部ではないが、会報に掲載されており、南極という自然の中からの授業が若い世代にどう受け止められたか、南極の魅力などが語られている。派遣された教員の中には、南極に魅せられて隊員に応募、59 次



南極OB会 国分会長

隊で越冬を終えようとしている教諭がいる。この教諭は、南極へ抱く期待の多くは様々な自然現象にあったとのことだが、遠くかけ離れた僻地で経験した人間どうしの絆にも魅せられたようだ。プロジェクト開始から 10 年、近い将来、南極授業で育まれた若い世代の人たちが、新しい力となって観測隊に参加する日が来ることを期待したいと思います。

<昭和基地から新年のメッセージ>

南極地域観測隊OB会の皆様

新年、明けましておめでとうございます。
はるか南極の地より新年のお祝いを申し上げます。

ここ昭和基地では、昨年12月22日に第一便、25日には見晴らし岩の北東に「しらせ」が接岸し、今は宮崎艦長をはじめとした「しらせ」乗員の方々の支援を頂きながら、堤隊長率いる60次、そして我々59次が協力して氷上輸送や建築作業などの夏作業を行なっている最中です。

今年は60次行動計画により、59次越冬隊と60次夏隊のほぼ全員が2月の越冬交代直後に「しらせ」に戻ることにしているため、1月中に全ての作業や引き継ぎを終えなければならず、各担当は大変な一ヶ月を迎えます。

思い起こせば今次隊の越冬は、58次隊に続き昨年3月にはオングル海峡がすっかり開放水面となり、59次隊初めての海水ルート「と

つつき岬ルート」が開通したのは7月末でした。その後オングル島南方へ海上ルートを延ばしたのですが、かつて無い広範囲な乱氷帯に阻まれ、スカルブスネスまでたどり着くのが精一杯でした。それと時期を併行して500本を越える燃料ドラムのS16への輸送やDROMLANの受け入れ、本格除雪、観測や設営作業等々、気がつくとも既に60次隊を受け入れている状況。改めて南極生活の1年間の早さに驚かされます。

皆様にとって今年も良い年になりますよう、心からお祈り申し上げます。



2019年1月 元旦

第59次南極地域観測隊

越冬隊長 木津暢彦
隊員一同



2018年忘年会にて（2018年12月5日）

第60次南極地域観測隊壮行会開催

南極OB会主催の第60次南極観測隊壮行会が2018年11月6日（火）、千代田区一ツ橋のレストラン「アラスカ」パレスサイド店で開催された。観測隊37名を含む73名の参

加があった。最初に、観測隊の壮途に向けた銭（はなむけ）の講演があった。講師は東京大学、名古屋大学名誉教授及び南極OB会会長の国分 征氏（7、13次越冬隊、18次夏隊長、32



堤 雅基隊長兼越冬隊長による第 60 次オペレーションの紹介



夏隊を代表してあいさつする原田尚美
第 60 次副隊長兼夏隊長

次隊長兼夏隊長)、演題は「60 年目の南極観測」であった。今年出発の観測隊は南極観測隊としては 60 回目の記念すべき隊であり、話題の中心は 6 次隊までの宗谷の時代から 7 次隊のふじの時代に切り替わる頃であった(本誌で別途、紹介)。続いて、本日の参加者に向けて、堤 雅基隊長兼越冬隊長(40、52 次越冬隊、49、50 次夏隊)より第 60 次観測隊オペレーションの概要について説明があった。第 60 次観測隊は夏隊 40 名、越冬隊 31 名の 71 名であり、他に、夏隊同行者が 29 名参加し、総勢 100 名となる。観測項目は第 IX 期 6 か年計画の 3 年目にあたり、大型の重点観測「南極域から迫る地球システム変動」が各観測分野で実施される。夏期のオペレーションでは内陸調査隊と地学隊員の 10 名が先導隊として航空機で一足早く日本を出発し、現地に到着し、海鷹丸による別動隊が海洋物理・化学、海洋生態系モニタリング観測を行う予定である。第 60 次隊は原田尚美夏隊長をはじめ、夏隊に 2 名、越冬隊に 5 名の女性隊員が参加することもトピックスのひとつである。

同会場での壮行会懇親会では熊谷宏靖氏(51 次、58 次夏隊)が司会進行を務めた。最初に南極 OB 会国分会長による挨拶があり、

続いて、吉田栄夫氏(日本極地研究振興会理事長、第 2 次隊他)による挨拶と乾杯の発声でしばし歓談に入った。宴もたけなわ、第 60 次南極観測協力を担う自衛艦「しらせ」の白方副長の祝辞に続き、伊村 智氏(国立極地研究所副所長、36 次隊他)から祝辞があった。続いて、茨城支部の馬場廣明氏(24、38 次隊)から近況報告があった。歓談を挟んで、木津暢彦第 59 次越冬隊長他越冬隊員からの温かい祝電メッセージの紹介があった。堤隊長と原田副隊長による出発の挨拶の後、参加した隊員一人一人の自己紹介があった。ここで、国分会長より隊長に南極 OB 会カレンダーが手渡され、大久保嘉明氏(9 次隊)より 9 次隊の 50 周年記念誌、福谷博氏(9、13 次隊)より愛蔵の書籍がプレゼントされた。さらに、今年は南極点に到達してから 50 周年になるが、これを記念して執筆していた関谷敏隆氏の南極点到達 50 周年記念絵本「南極点 夢に挑み続けた男 村山雅美」(p.18 に紹介あり)も完成間近となり、本人から紹介があった。壮行会は最大に盛り上がり、全員で記念撮影となった。竹内貞男氏(10 次隊他)の祝辞と中締めで、壮行会は和やかに閉会となった。

(神田啓史)



南極 OB 会主催第 60 次隊壮行会参加者の皆さん

第 60 次隊壮途記念講演 「60 年目の南極観測」

国分 征（7 次、13 次、18 次、32 次）

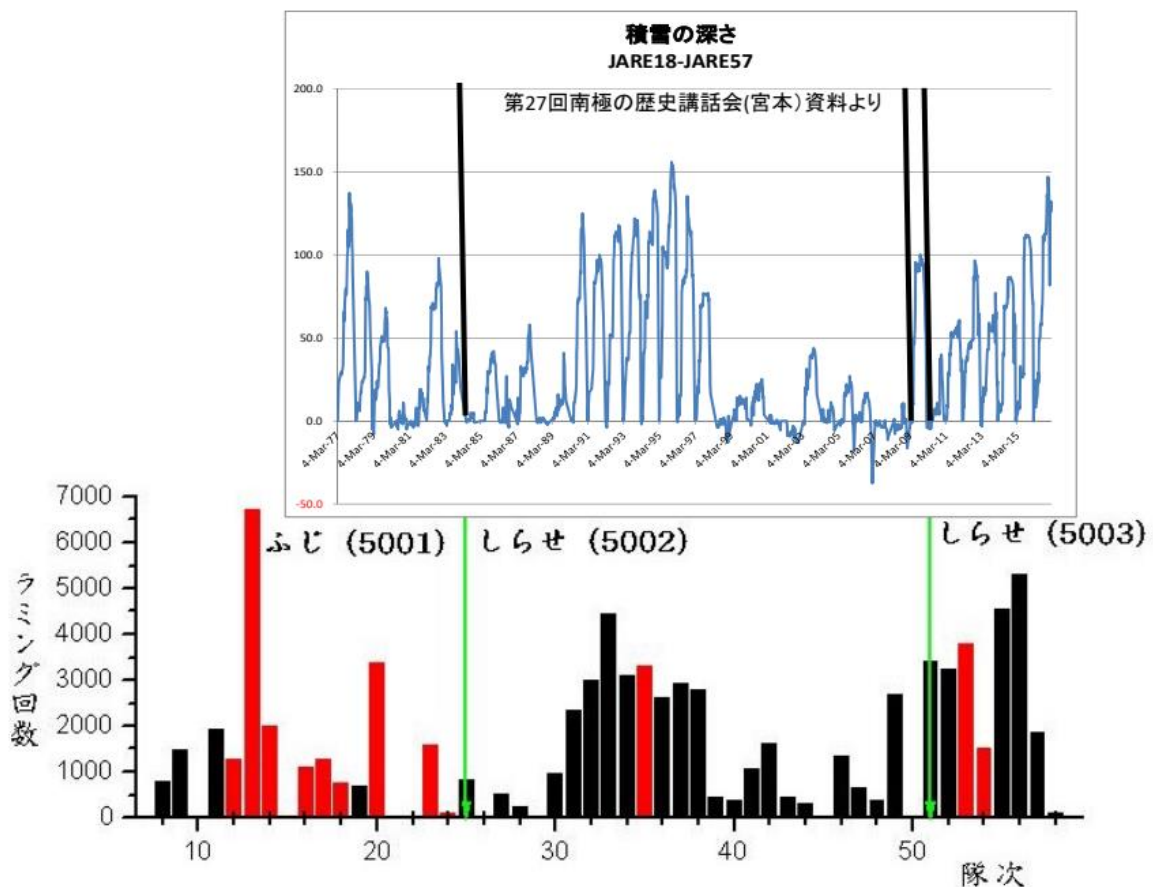
60 年目を迎えた南極観測だが、宗谷時代特に 1-3 次の苦闘の時代については、多くのことが語られてきた。2 回目の南極事始めともいべき 7 次基地再開は、砕氷艦「ふじ」による昭和基地接岸により順調にスタートしたが、はじめての基地接岸には、これまで表には出てきていなかった経緯があったようである。ここでは先ごろ亡くなった「ふじ」副長・8 次艦長を務めた松浦光利氏が、「自分史」に記している接岸に至る経緯について述べてみたい。松浦氏が数年前の 7 次隊の会で、これまでどこでも話したことがないとの前置きで話し出したことで、後に「自分史」を頂いて、この経緯などについて知りえたことである。私は 7 次隊に参加したが、砕氷行動決定の経緯などについては全く知らなかった。

基地再開は、ロケットによる超高層物理観測の実施、南極点往復調査旅行の実施、大陸



講師の国分征氏

内部の調査拠点の設置、および観測用航空機の昭和基地配備等の早期実現を基本方針としてすすめられたが、新砕氷艦「ふじ」の就航にもかかわらず基地への接岸は前提とされて



昭和基地の積雪量と砕氷ラミング回数の比較（赤で示した隊次では接岸できなかった）

南極OB会第18回「南極の歴史」講話会、「定常気象隊員の越冬生活」（宮本仁美、2018年9月22日）より

いなかったようである。例えば、出発前の 7 次村山隊長の記事(極地 1、日本極地研究振興会 1965)に記されている夏季オペレーションの予定では、後の大陸旅行の主力となる大型雪上車(KD601)揚陸は氷上輸送とされている。

「ふじ」は順調に 1965 年 12 月下旬に、定着氷に接岸し、翌年 1 月中旬には、KD60 型大型雪上車を残しほとんどの物資が基地に空輸され、残された問題は KD60 の輸送であった。大陸への直接氷上輸送などいろいろと検討されたが、困難であり「ふじ」の基地接岸以外に道はないとされ、村山 7 次隊長も最悪の場合は持ち帰りもやむを得ないと考えていたようだった。その頃の氷状判断では、基地への砕氷航行は極めて困難であり、松浦副長自身も、当然ではあるが海図もなくどこに暗礁が隠れているかもしれない海域に侵入することは、文字通り一大冒険航行になると記している。

武藤越冬隊長と松浦副長は、この事態を打開するため、朝日、共同通信と NHK、3 名の同行報道関係者には秘密裏に、深夜に砕氷行動を議論する会議を開くこと図った。この時の会議でも、砕氷航行は極めて困難で、最悪の場合は持ち帰ることもやむを得ないとの雰囲気だったようだ。本多艦長は、自分の氷海航行の方針は、“氷とは闘わない”ことでありこれ以上の前進はできないとも述べていたようだ。「ふじ」の砕氷能力を確かめていないし、全力で砕氷をやって、それでだめなら持ち帰りも納得されるのではないかとの意見も出たが、翌日氷上調査を行うことが結論だった。しかし、翌日、艦長の判断が急変し、“これから南下を試みるので準備せよ”という命令が下されたという。秘密会議の効果があったと思いうれしかったとある。

1 月 25 日夕刻航行を始めると、航行不能ともされていた冰山群内および付近の氷の厚さは 20 cm 位の厚さで、面白いように前進したという。途中でソナーが故障、1 日の停留はあったが、結果としては、1 月 27 日 20 時 30 分ごろ、東オングル島見晴らし岩東側の定着氷にはじめて接岸した。「ふじ」が砕氷航行を始めたころ、私は、基地でアンテナ建設にたずさわっていた。多分、接岸の前日だったと思うが、アンテナポールが立ち上がって、アンテナを固定するためポール上部で作業していた大瀬隊員が、“「ふじ」が見えるぞ”と

叫んだ。「ふじ」が接岸するなどとは考えてもいなかったのも、思わず本当かよと言ってしまったことが思い出される。接岸後、白夜のもと雪上車は直ちに氷上に降ろされ、基地に運ばれた。7 次のラミング回数は、50 回、それ以後の回数に比べ、極めて少ない。8 次松浦艦長の時は、784 回で 1 月 14 日に接岸している。

7 次以後、11 次までは「ふじ」は、昭和基地に接岸し、大陸旅行用 KD60 や 10 次隊から始まったロケット関連施設の資材など輸送は順調に行われた。しかしながら、12 次以降氷状は悪化、「ふじ」は 19 次に一度接岸できただけである。これまでのラミング回数の中では、13 次は 6737 回と、最高を記録している。

気象担当隊員 OB の宮本氏が、「南極の歴史」講話会で示した昭和基地の積雪記録と、ラミング回数を比べてみた図を見てみよう。砕氷能力がほぼ同じ二代目の「しらせ」では、積雪量とラミング回数の非常に良い相関を示していることがよくわかる。また、53、54 次の「しらせ」が接岸できなかった時期は、積雪が増えている時期に当たっていることもわかる。この図に示されているのは、18 次以降の積雪データであり、「ふじ」時代の前半は示されていないが、11 次までに比べ 12 次以降は積雪が多く、氷状に恵まれなかったため接岸ができなかったと考えられる。因みに、12 次から 18 次の間は、昭和基地西側に大きさ約 25 km 平方の大冰山があったという記録があり、基地周辺の氷状は、それ以前に比べ大きく変わっていたと思われる。



接岸した「ふじ」

再開から数年間は好条件に恵まれ、「ふじ」の砕氷能力でも接岸でき、当初計画されていた極点旅行やロケット実験準備が、ほぼ順調に実施できたといってもよいだろう。9 次では、極点旅行が行われ、11 次隊によるみずほ観測拠点の建設、14 次で第 1 期ロケット実験は終わり、15 次隊では最後の KD60 が氷上輸送により基地に運ばれ、再開時の基本計画は、ほぼ達成されている。

第 27 回「南極の歴史」講話会の概要

(2018 年 9 月 22 日 (土) 14:00~16:00 日本大学理工学部 1 号館 133 教室(3F))

第 27 回「南極の歴史」講話会は演題Ⅰ「定常気象隊員の越冬生活」、講師 宮本仁美氏 (30 次冬, 37 次冬、52 次冬)、演題Ⅱ「あすか基地越冬談」、講師 石沢賢二氏 (19 次冬、24 次冬、28 次夏、32 次冬、36 次冬、50 次夏、53 次冬) の 2 テーマで開催された。講演の概要について以下に紹介する。

定常気象隊員の越冬生活

宮本仁美 (30 次冬, 37 次冬、52 次冬)

1. 気象隊員として派遣されるまで

基地再開に際し、南極観測は大きく定常観測と研究観測の 2 つに分類され、海洋、測地、電離層などとともに気象も定常観測となった。定常観測の実施母体として、気象庁に対し 1964 年 6 月に南極観測統合推進本部から要請があり、同年 10 月の庁議において気象庁として実施することを決定した。

定員は 1967 年に観測要員 2 名が認められ、その後あすか基地の開設を契機に 2 名、さらに地上オゾン濃度の観測開始に伴い 1 名が増員となり、現在は定常気象としては 5 名となっている。観測をサポートするため、気象庁観測部計画課に南極観測事務室がある。南極観測を希望する若手職員が全国各地におり、各管区・沖縄気象台を通じて毎年 10 名から 20 名の応募がある。ちなみに、現在と募集方法が若干異なるが 1 次では 144 名の応募があった。

今年出発する 60 次も含めてこれまでの気象庁派遣隊員は 278 名になる。そのうち 8 名が女性隊員である。定常気象隊員は出発まで気象庁の南極観測事務室で準備をしている。

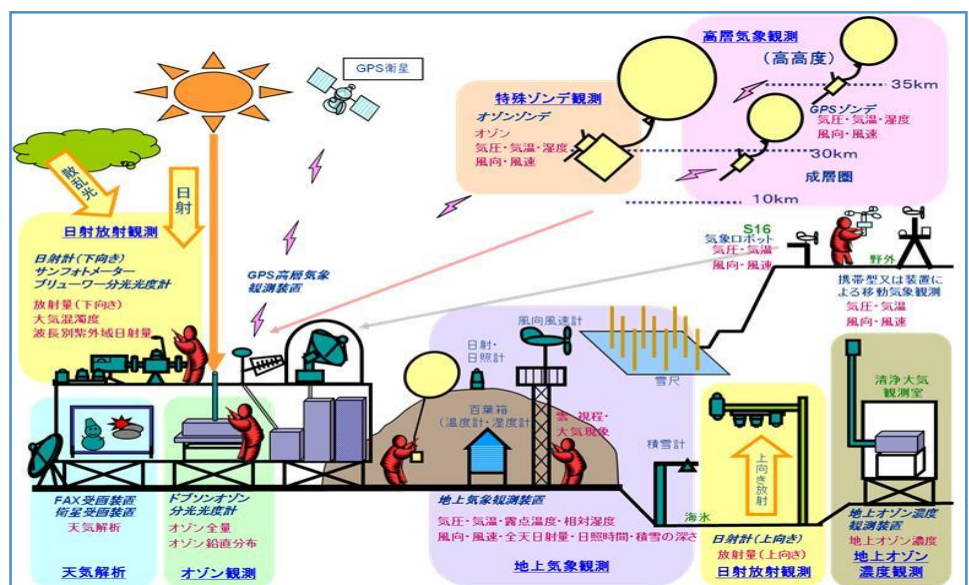
2. 気象隊員の仕事

気象観測は 24 時間 365 日休みなしのため、昭和基地では気象隊員が交代で気象棟につめている。30 次、37 次の昭和基地の定



講師の宮本仁美氏

常気象隊員は 4 名で、通常は日勤、夜勤、ゾンデ番、事務日勤を一週間毎に交代した。旅行などに気象隊員が参加して人数が足りないときは日勤と夜勤の交代時間をずらすなどの工夫をした。日勤や夜勤をしながら、当直な



定常気象観測の概要

ど隊の仕事もこなすのは大変で、特に2人の時はゾンデ番を他の隊員にヘルプしてもらうこともしばしばであった。短い周期で日勤と夜勤を交代するので、越冬中は常に睡魔との闘いだった。

主な観測業務には、3時間毎の目視観測通報、12時間毎の高層観測通報の他、晴れた日はオゾンの観測がある。

観測要素としては、1次の地上気象観測から始まり、3次隊から高層観測が、5次からはオゾンや日射の観測が加わった。その後もオゾンゾンデ、大気混濁度、日射放射、地上オゾン濃度、降雪の深さなどの観測項目が追加されており、観測場所は基地全体に広がっている。定常気象観測の業務の概要を図に示す。高層気象観測では、風が強いときの放球は大変である。また上空の気温が下がる冬季にはゾンデの到達高度を上げるため、気球の油漬けをしている。

観測ではないが、定常気象の業務のひとつに天気解析がある。平たく言えば毎日の天気予報で、次の日には結果が出てしまうため結構心理的に負担だった。30次のころは、短波(HF)で受信する南アフリカやオーストラリアの天気図、極軌道衛星の画像くらいしか資料がなく、電離層の状態が悪いと衛星写真だけが頼みの綱だった。悪天が予想されるときや、隊の野外活動、特に航空ミッションがあるときは本当に神経を使った。天気予報は毎夕のミーティング時に日勤者が発表していた。今は気象庁の数値予報をはじめとする各国の数値予報などが入手できるが、それでもプレッシャーはあるだろうと思う。

3. 気象にまつわる話

1967年から昨年までの年平均気温の推移を見てみると、年平均気温としてはほとんど変化していないことがわかる。月単位では、秋は低下傾向で春は上昇しているように見える。

月平均風速は、4月が一番強く、ついで3月となっている。ところが、これまでに観測した極値からは、3、4月は平均的には風は強いが、極端な強風はないことがわかる。年平均風速の経年変化からは、春秋は横ばい、夏と冬が増大傾向で、年平均でも強くなっている、という傾向が見える。

37次では最大瞬間風速の極値61.2m/sを観測した。昭和基地で60m/sを超える風を観測

したのはこのときだけである。基地再開以降で、日平均風速が30m/s以上かつ日最大風速が40m/s以上かつ日最大瞬間風速が50m/s以上の日は7回あった。8年に一度くらいの強風ということになる。140年を超える観測記録のある東京で、日最大風速が30m/sを超えたのは1回だけだが、昭和基地では30m/sの風は珍しくなく、30次は11回、37次は10回あった。



みずほ基地での高層気象観測（30次大堀隊員提供）

各要素の極値を観測したのがどの隊が調べたところ、17次は気温が低く風が弱く日照時間が多く雲量が少ないという、非常に穏やかな越冬だったようである。

ブリザード回数に増減の傾向はなく、数は少ないが12月や1月の夏場にも襲来する。

昭和基地でこれまでに雨が観測されたのは21日のみ、これは約1,000日に一度、2.8年に一回くらいの頻度である。

海氷上の雪尺の観測結果からは、10次台、30次台、50次台で積雪が多いことがわかる。

気象隊員は、昭和基地だけでなく、調査旅行中やしらせ船上でもいろんな気象観測を行っている。写真は、30次のみずほ基地での高層気象観測の様子である。

4. おわりに

52次からの第Ⅷ期6か年計画から、定常観測は基本観測のひとつとなった。基本観測とは、研究に不可欠な観測データを継続的に取得することを目的とし、国際的または社会的要請があり、観測方法が確立しており、速やかにデータを公開し、継続した観測が必須な観測である。その基本観測の大きな柱である定常気象観測を維持するためにも、今後の定常気象隊員の活躍に期待したい。

「あすか基地」と関わって 35 年

石沢賢二（19・24 次冬、28 次夏、32・36 次冬、50 次夏、53 次冬）

1. 第 25 次隊での第 3 の基地調査に参加

初代「しらせ」が第 25 次隊から就航した時、南極観測の目玉の一つが、「昭和」「みずほ」に続く第 3 の基地の建設だった。第 25 次夏隊では、基地選定の調査が、24 次越冬隊と共同して行うことになった。先発隊は、25 次隊の白石和行さんをリーダーとしたスノーモビル隊で、24 次隊からは、中山芳樹さんと私が参加した。スノーモビルに食料と装備品を積んだ橇を牽引して、テント泊を続けながら、セールロンダーネ山脈の北側一帯を調査した。中山さんと私は、24 次越冬中に、昭和基地からみずほ基地、やまと山脈、ベルジカ山地を経由して、セールロンダーネ山脈東部まで雪上車で旅行した。越冬中のこの地域の印象は、素晴らしい山容が広がる絶景だが、地吹雪が荒れ狂う厳しいところというものだった。ところが、25 次隊の夏で訪れた山脈北側は、海岸部から山脈に近づくほど風が弱まり、穏やかで良いところだった。その後、雪上車隊も到着し、ブライド湾から 30 マイル地点に小屋を建て、26 次隊からの輸送拠点とした。



あすか基地場所選定調査（1985 年）

2. 第 28 次隊の初越冬まで

第 26 次隊から、本格的な「あすか基地」建設が始まったが、基地として選ばれたところは、我々が推薦した場所とは異なっていた。25 次隊の調査でわかったことは、山脈の東側は、バード氷河から吹き降ろすカタバ風（斜面下降風）が吹き荒れるが、山脈に近い西側は、その影響は少なく、過ごしやすい場所というものだった。しかし、26 次隊は、「30 マイル」点からの雪上車輸送を考慮すると、山脈近くは遠すぎて効率が悪いので、途中の風が強い



講演する石沢賢二氏

地点を選定してしまった。この選定は、後々まで、基地運営に大きな影響を与えることになった。

ともあれ、26 次夏隊では、主屋棟を建設、越冬隊は、陸路雪上車 SM50 で、山脈の南側からあすか基地まで到達、内陸を経由した昭和基地までのルートを確認した。続く 27 次越冬隊も、雪上車 7 台でやまと山脈から到達し、28 次隊と共に建設作業を行った。私は、28 次夏隊の設営隊員として、建物建設や設備工事に従事した。今から思い起こすと、南極観測隊に参加したなかで、この頃が最も充実していた。それは、自分で考えたいいくつかのアイデアを現地で反映させることができたからである。たとえば、汚水廃棄場所として、基地から 50m 離れた位置に温水掘削装置を使って 30m の穴を掘った。これは、温かい温水の熱による建物の不同沈下を防止する目的だった。また、トレンチ通路の屋根がけを段ボール紙で行い、雪の屋根が沈下した時には、段ボール紙をナイフで切り取ることで、雪洞拡張を容易にしたことなどである。

3. スノードリフトに悩まされる

鮎川勝隊長他 8 人の越冬隊からは、スノードリフトにより、建物のほとんどが 1 年足らずで屋根付近まで埋没したという報告だった。建物の風下側には大量のスノードリフトが形成され、建物全体がその雪の圧密とともに不同沈下した。その後の計測では、発電棟は、建設後 4 年半ばで 37cm も風下側が沈下した。

また、風下側に設置した基地入口の除雪に苦労した。



アイスドームの製作実験（第 32 次隊）

4. 32 次隊で越冬

28 次隊から始めたあすか基地越冬は、5 年目の 32 次隊が最後となった。ドームふじでの深層掘削計画が始まったことで、両立が難しかった。また、越冬の意義が明確でなかったことも要因だった。私は、機械隊員の一人として参加し、あすか基地の自然環境を利用して何か面白いことができないかと考え、小型風力発電機とアイスドームの実験をすることにした。風力発電機の出力は、1kW と小さいが、とにかく耐久性を第一優先とした。結果的にこの風車は、基地閉鎖後 2004 年に再訪した時も回転していたので、13 年間回り続けたことになる。また、大きな風船を膨ら

まし、水と雪をかけて直径 10m、高さ 3m のアイスドームを作り、倉庫などとして使おうという実験は、南極では初めての試みだった。造水に苦労したものの、あすか基地の出入り口や倉庫として、夏から基地閉鎖時まで使用することができた。

そして基地閉鎖後は、雪上車と橇を昭和基地まで回送するため、山脈を超えてみずほ基地経由でトラバースすることにし、1991 年 12 月 22 日基地を出発、翌年 1 月 18 日に S16 地点に無事到着した。

5. 今後のあすか基地

2008 年にベルギーがプリンセス・エリザベス夏基地をあすか基地の南西に開設した。この基地を拠点に、日本は、隕石探査などをベルギーの支援で行った。私は、さらにドームふじ基地への内陸輸送拠点として、セールロンダーネ地域が最適だと考えている。それは、輸送距離が短いことの他に、外国船を使った大型のトラクター導入などができるためだ。最近、あすか基地から 6 km 離れたロムネエス山の風下の青氷地帯に、大型ジェット機が離発着できる滑走路が造成された。これにより隊員のアクセスが容易になり、昭和基地を拠点にするよりメリットは大きいはずで、今後は国際協力の下、効率的な内陸輸送をすることが望まれる。

話 題

初代南極観測船「宗谷」竣工 80 周年記念

アマチュア無線局 (8J80JD0X)

宗谷の船上から全国に向けて電波を発信しました

小林正幸（25 次冬、46 次冬）



一般公開されている「宗谷」

本年 (2018) は 1956 年 11 月 8 日に第一次南極地域観測隊と共に南極に向け出港し、その後 6 次隊まで南極を往復し、日本の南極観測の礎となった「宗谷」が竣工してから 80 年を迎えました。

「宗谷」は現在、東京品川区の「船の科学館」の前面水面で一般公開されています。アラートオレンジの船体は、新交通システム「ゆりかもめ」からもその姿を見ることができます。

南極 OB 会アマチュア無線クラブでは、これを記念して特別なコールサインの無線局(8J80JDOX)の免許を得て、「宗谷」の船上(船橋にある海図室)より日本全国に向けて電波を発信し、11月3日、4日、10日、11日の4日間で、延べ1,399局との交信に成功しました。

1次隊出航の様子を知る方や、初期の昭和基地のアマチュア無線局と交信したことがある方とも交信でき、南極観測の歴史を改めて感じることができました。

一般見学者の中には、モールス符号の音に気付き、興味深く海図室をのぞき込んでいました。また、有資格者によるゲスト運用も実施できました。

今回のイベントにご理解をいただき、ご支援ご協力いただいた皆様に感謝致します。



宗谷の海図室で交信するOB会員

※南極 OB 会アマチュア無線クラブでは、常時クラブ員を募集しています。アマチュア無線を通しての南極観測事業のアウトリーチ活動に興味のある方のご連絡をお待ちしています。

囲碁同好会の活動について

安田昌弘 (19次冬)



碁会所「天元」に集う南極碁会メンバー

南極 OB が集う囲碁同好会について報告します。12次隊は帰国後、毎年集まりを続けていますが、中には囲碁を楽しむ人達もいます。その中の3人(福井、見城、伊藤正則)が村越邸に押しかけたのがきっかけで、やがて12次隊の囲碁好きが新宿の碁会所に「12次会」という名称で集うようになりました。碁会の後には一杯を楽しむ「一杯会」が開かれ、昭和基地での思い出話で盛り上がりました。或る年、新潟県の村越山荘で一泊碁を楽しんだことがありました。囲碁は見るだけの多賀正昭さん(8w, 12w, 21w)が、ヨットで日本一周したウィスキーを持参し、食事まで用意してくれました。また、八王子市の箕岡三穂さん(19w)の別荘で一泊碁を楽しんだことも何

回もありました。箕岡夫人からは手作りの酒のつまみを提供していただき、より楽しい碁会になりました。12次会のメンバーは入れ替わりがありましたが、現在でも毎月8名ほどが新宿の碁会所に集まり、囲碁を楽しんでいます。現在までのメンバーは村越望(1w, 4w, 9s, 10s, 12s, 15w)、作間敏夫(1w)、柴田鉄治(7s, 47s)、国分征(7w, 13w, 18s, 32s)、平澤威男(8w, 11s, 14w, 17s, 19w, 25w)、福谷博(9w, 13w)、酒井重典(10w, 16w)、伊藤正則(12w)、見城正幸(12w)、福井徹郎(12w)、村松照男(12w)、箕岡三穂(19w)、安田昌弘(19w)、山岸久雄(19w, 26w, 36s, 38s, 45w, 53s)、酒井量基(22w)、桜井治男(24w)、岩下剛己(24w)、元極地研職員の湯本清次、妹尾茂喜さんです。



箕岡三穂氏のメモリアルモニュメント

今年の 10 月には神奈川県湯河原の四季彩館に 9 名が集い、碁会と夜の一杯会・カラオケ会を楽しみました。翌日、箕岡さんの三年忌を前に、相模原市に作られたメモリアルモニュメントを 6 名で訪ね、12 次会の活動を霊前に報告しました。モニュメントには「山と冒険、そして旅と文学を愛し 40 年 共に生きた外科医 箕岡三穂に感謝を捧げる」と刻まれていました。平成 28 年 10 月に箕岡別荘で一

泊碁会を開催しましたが、その月末に箕岡さんは突然逝去されたのでした。箕岡さんは 19 次隊でドクターとして越冬され、みずほ基地でも仕事をされました。

12 次会はこの度、名称を「南極囲碁会」と改め、活動を継続します。南極 OB の方で、囲碁と一杯会を楽しみたい方は、どうぞ南極 OB 会の山岸久雄*までご連絡ください。

* : hyamagisi2000@yahoo.co.jp

南極倶楽部「山の会」で日和田山へ

鈴木かおり（会友）

3 回目を迎えた「山の会」ですが、今回も前回、前々回同様、雨予報のなか決行。おかげで登山客は少なく、のんびり山歩きが楽しめました。

開催したのは昨年 10 月 4 日で、場所は埼玉県の日和田山。集まったのは神田さん、野元堀さん、阿保さん、渡辺さん。初参加の福谷さん、白壁さん。そして鈴木氏の 7 人でした。集合場所の JR 高麗駅から、まずは秋らしく巾着田でコスモス畑を見学・・・の予定でしたが、数日前の台風でコスモスが全滅してしまったとのことで、残念ながら断念。巾着田は曼殊沙華で有名ですが、コスモスも見事らしいので、それはまた来年以降のお楽しみということでした。



金刀比羅神社前は絶景ポイント

駅から住宅地をしばらく歩くと、日和田山の登山口がありました。歩きやすく爽やかな杉木立の山道です。途中、すれ違う遠足の小学生たちに励まされたりしながら登っていくと、1 時間ほどで金刀比羅神社に到着しました。神社まではキツイ岩場の男坂となだらかな女坂の 2 つのルートがあり、前日の雨の影響か男坂が通行禁止になっていたのも、女坂

ルートで神社へ。ここがなかなかの絶景で、眼下に日高市街や巾着田（本当に巾着の形をしている！）が広がり、こんもりした森の向こうにうっすらと奥多摩の山々も。お天気がよければ、その先に富士山も見えるようです。



「山の会」第 3 回は日和田山へ

さらに 10 分ほど登ると、山頂です。木々に囲まれて展望は今一つですが、ここで昼食。野元堀さん特製の大好評！豚汁＆ラーメンをいただきました。回を重ねるごとにお酒の種類が増えていくのは気のせいでしょうか？阿保さんがソーセージを焼いて、おつまみもバッチリ。あとはおにぎりと、高麗駅まで見送りに来てくださった神田さんの奥様の差し入れ「飯能銘菓・四里餅」もデザートにおいしくいただきました。毎度ながら、運動量よりはるかに多いカロリー摂取量です。

帰りは同じルートを下ります。途中、阿保さんの新品のストックが折れる珍事件（？）や、大笑いしたトイレ事件（説明は控えます）などもありつつ、元気に下山。楽しい山行でした。シメは飯能駅そばの中華料理店で反省会をしました。心配した傘の出番はほぼありませんでしたが、いつか快晴の山行もしてみたいです。

南極関連情報

第 61 次南極地域観測隊長・副隊長決まる

2018 年 11 月 8 日（木）に開催された第 153 回南極地域観測統合推進本部総会において第 61 次南極地域観測隊長兼夏隊長として青木茂氏（39 次冬、43 次夏同行者、56 次夏同行者）、副隊長兼越冬隊長として青山雄一氏（36 次冬、49 次冬、55 次夏、59 次夏）、副隊長兼夏副隊長：夏期オペレーション担当として熊谷宏靖氏（51 次夏、58 次夏）を決定した。

文部科学省主催 第 60 次南極観測隊壮行会

2018 年 11 月 7 日、明治記念館において南極地域観測統合推進本部主催の壮行会が举行され、堤雅基観測隊長兼越冬隊長、原田尚美副隊長兼夏隊長以下、夏隊、越冬隊員 71 名、南極授業担当同行教員 2 名を含む夏隊同行者 33 名（しらせ乗船者等 21 名、海鷹丸乗船者 6 名）、宮崎好司しらせ艦長以下約 180 名の乗組員および隊員および乗組員家族、並びに関係者多数が出席した。

壮行会では観測隊隊長、しらせ艦長から出発に当たっての決意が述べられた。また柴山昌彦文部科学大臣、岩屋毅防衛大臣から壮行の挨拶があり、来賓の国会議員等から激励の挨拶があった。

「しらせ」は 11 月 10 日に晴海ふ頭を出港、観測隊は 25 日に成田から出国し、豪州フリマントルで合流し、南極昭和基地に向う。

昭和基地に第一便

2018 年 12 月 22 日 7 時 58 分（昭和基地時間）（日本時間 13 時 58 分）、南緯 68 度 59.44 分、東経 39 度 8.22 分（昭和基地西方 9.3 マイル）の定着氷に停留中の「しらせ」より、堤雅基第 60 次観測隊長ならびに宮崎好司しらせ艦長が乗ったヘリコプターの第一便が発艦し、同 8 時 5 分、第 59 次越冬隊（木津暢彦越冬隊長ほか 30 名）の待つ昭和基地に到着した。

「しらせ」の昭和基地接岸

「しらせ」が、2018 年 12 月 25 日（火）現地時間 14 時 25 分（日本時間 20 時 25 分）、昭和基地の沖合約 500m の定着氷に到着し、昭和基地接岸を果たした。

今シーズンは、往路ラミング回数は 344 回であった。



昭和基地に接岸した「しらせ」

（「第一便」、「接岸」の両記事は、国立極地研究所ホームページより）

連載「帰国後の各隊の動き」（隊次順に掲載）

50 周年を迎えた JARE9 の動向

JARE9 は越冬 50 周年を祝って、2018 年 2 月に記念誌『第 9 次南極観測隊の記録～忘れ残りの記～』を出版しました。その編集出版に際しては喜納淳記録委員が持ち前の編集才能・製本技術を遺憾なく発揮してくれました。

●墓参り

その後 5 月 13 日（日）に越冬 50 周年祝宴「JARE9・大集合」を菜の家にて盛大に举行。企画設定を一手に引き受けた増田博常任幹事の努力が実った瞬間でもありました。

JARE9 にとって集大成であった極点旅行、



墓参りに参集した人たち（鈴木かおり氏撮影）

1968年12月19日の南極点到達から50周年を迎えました。今年は村山雅美隊長生誕100年の年でもあり、2018年（平成30年）11月11日隊長の墓参りをしてきました。

馳せ参じたのは渡辺興亜、赤尾秀子、鈴木かおり、小林美波、喜納淳、福谷博、遠藤八十一、増田博、森岡昭、大久保嘉明、方子の総勢11名で、多磨霊園の村山家墓前に集合。清掃の後「記念誌出版」等を報告し、お参りして来ました。

帰り際、有志で武蔵小金井駅前の居酒屋に立ち寄り、墓前で果たせなかった「献杯」をして墓参りを締めくくりました。

越冬時、内陸担当の極点旅行隊員は12名でしたが、過酷な内陸旅行が体を蝕んだのでしょうか、村山雅美隊長のほか、土屋貴俊（機械）、細谷昌之（機械）、柿沼清一（測地）、藤原健蔵（地理）、川崎巖（設営一般）、西部暢一（通信）、そしてごく最近になって矢内桂三（地質）の各隊員が他界されています。

なお先日、村山家から『604 模型と総理大臣顕彰の表彰状』が極地研に寄贈されました。

●2018年平成最後の「気楽な忘年会」

墓参り後の居酒屋で、「今一度集まって極点到達前後をゆっくり話し合おうではないか」ということになり、『気楽な忘年会』と銘打って「菜の家」で行うことにしました。その場にいた者同士の都合で、日程は2018年12月22日（土）に決定。またまた増田博常任幹事に負担が・・・

旅行隊は1968年12月19日に念願の南極点に到達し、極点の米国隊員や日本からの鳥居鉄也第8次越冬隊長や報道陣らが盛大に出

迎えました。

従って50年前の今頃は米国の南極点基地（アムンゼン・スコット基地）で歓待の真っ最中、懇親を深めるとともに鋭気を養っていた頃です。その後5泊して25日帰路に着きました。

極点に足跡を残した旅行隊メンバーの小林昭男、山本利一、江頭庸夫の3隊員は、今回残念ながら体調が整わず出席はかないませんでした。

旅行隊員ながら重傷事故で旅行隊から離脱した遠藤八十一隊員や当時の基地隊員と夏隊員、応援団員ら総勢20名余が今回の忘年会に参集しました。



（最後の？）9次隊忘年会

おそらくJARE9の忘年会は今回が最後になるだろうということでもあり、ワイワイガヤガヤ当時の思い出に花を咲かせ、最後に参会者の爾後の健康と佳き新年を迎えられることを祈念してお開きとしました。

（9次 チョンガ長・大久保嘉明）

13次会報告

第13次観測隊員の集まりの「13次会」は、1973年の帰国の年からほぼ毎年開催しています。はっきりした記録はないのですが、これまでに46回程開かれたことになります。東京はもちろんのこと熱海、箱根、山中湖畔、鎌倉、大洗、銚子、船橋（初代「しらせ」に宿泊）、筑波、御岳山等関東近辺をはじめに、札幌、秋田、松島、金沢、名古屋、岐阜、伊勢、愛媛、長崎、沖縄等いろいろな所で開催しました。毎回20人前後の仲間が参加しています。今回の13次会は2018年10月18



柴又「川千家」に集合した皆さん

日、19日に「寅さん」ゆかりの東京、葛飾、柴又で行われました。ゆっくりと柴又帝釈天、寅さん記念館、山田洋二ミュージアム等を見学して、夕方から柴又の「川千家」で宴会を開きました。

宴会は越冬副隊長の国分さんの挨拶と乾杯の音頭で始まりました。(川口越冬隊長は少し歩行が危ないとのことで欠席されました。川口隊長の13次会欠席は初めてかと思います)。

参加者は18名でした。前回の鎌倉での会では4人の奥様方の参加があったのですが、今回は残念ながらご婦人の参加はありませんでした。

前回は佐野さんと玉木ドクターが亡くなられた後の会となり、黙祷からの開催となりましたが、今回の13次会ではうれしいことにこの1年で亡くなられた仲間がなく、黙祷無しで始まりました。これまでに40人の仲間のうち、残念ながら12人が他界されています。

各隊員が近況報告していき、まだまだ色々と元気に活躍されていることが伺えました。しかしながら、多くの人は健康状態の話から始まりました。これはしょうがないかな、皆さん70歳、80歳代です。酒が進む中いろいろな話が行きかい、にぎやかになり、最後は越冬中の宴会でいつも歌われていた仲間の梅ちゃんが作詞した「南極行っただなた」を皆で合唱して楽しい時間を過ごし、来年は

岐阜あたりで開催することを決めてお開きとなりました。

柴又で宿泊した翌日、川口越冬隊長の家にお伺いいたしました。隊長の家は松戸で柴又から近く、多くの仲間が隊長宅に同行しました。隊長は少し歩行が危ないとのことでしたが、大変お元気でした。皆さんが近況報告したりして2時間ほど過ごし、まして、「次回での再会を楽しみにしましょう」として散会しました。



川口越冬隊長のお宅で

写真は帝釈天近くの宴会場での記念撮影と川口さん宅での記念撮影です。(12次隊の多賀さんが数年前から準13次会会員として当会に参加されています。越冬交代時期に一緒に活動しましたので、13次隊の皆さんは歓迎しております。)

(13次 山崎茂雄)

第20次隊出発40周年の集い

今シーズンは60次隊が活躍している中、日本出発40周年を記念して「20次の会」をもった。このところ、毎年、隊員の居住地周辺ということで、全国を回ってきたが、今回は久しぶりに東京地区での開催となり、立川・極地研究所に近い青梅に集合した。紅葉の始まりかけの多摩川上流岸に建つ「かんぼの宿青梅」に宿泊。米寿の吉田隊長以下、はるか札幌からの山崎越冬隊長、平日開催で久しぶりに出られた木内ドクターを含む14人がなごやかな一夜を過ごした。宿帳を記す時に、改めて全員が65歳以上であることを再認識。近況を交換し合った夕食後に



<写真、かんぼの宿青梅>20次隊参加の皆さん

は、40年前のNHK衛星中継のビデオ(金戸進氏-19、28、38次-)のご好意でデジタル化)を鑑賞し、若き姿、特に既に先立たれた方々を見つけ、往時を偲んだ。

翌日はタクシーに乗り合い、立川の極地研究所を訪問。今回は未だ存在しなかった南極・北極科学館を見学。最近の南極、北極での活躍を確認して皆さん満足の模様。立川で昼食（1名追加参加）後解散となった。そろそろ

「20次の会」も店じまいかとの声もあったが、いや、まだまだ集まれる内は続けようとの声が多く、引き続き、来年は茨城方面での開催を約して散会。

（20次 和田、山内）

24次隊、『第2回しらせペンキ塗り+第6回同窓会』



集合した24次の皆さん

11月10日（土）天気は晴・無風と11月にしては温かく絶好のペンキ塗り日和であった。ペンキ塗りは11名が参加し、第1甲板右舷中央、艦尾の仕上げ塗りと第2甲板右舷船首部分の錆落とし・下塗りを行なった。6名は昨年5月の第1回目を経験しているだけに余裕を持って作業開始。初参加者も初々しく始めたがすぐに慣れ、作業に没頭。午前11時過ぎには、奇しくも同日晴海埠頭を出港した現役の「しらせ」が見えるはず、との情報が入り全員で艦橋屋上に行き双眼鏡で探索するもモヤがかかっていてその姿を見ることはできなかった。

昼食タイムは隊員公室（食堂）で持参したお弁当食べながらワイワイがやがやとミニ宴会。午後は仕上げ塗り作業が早く終わった時点で全員が船首部分に移り、錆落とし・下塗り作業を加勢。隆起した錆の塊を振動（圧縮空気、電動）やハンマーの衝撃で除去し、さらに残った錆をグラインダーで落とし、錆止めのペンキを塗る。錆が無くなるのはとても気持ちの良いもので達成感は半端ない。目につく錆は残らずやっつけてやろうという気になる。この作業こそ船のペンキ塗りの醍醐味であった。

16時過ぎ、予定された作業は完了していないが急遽作業終了となる。見学者（20名近く）が乗船するにあたり、錆落とし作業の騒音が艦内に響くと説明が聞き取れないからとのこ

と。やり残した作業に後ろ髪をひかれながら片付けを行い、錆を落とした甲板で記念写真を撮影。

16時半には隊員公室でおでん鍋を囲みながら同窓会の宴会を開始。遅れてきた隊員、北海道から駆けつけてくれた前隊長も加わり24次隊は13名、それに艦の管理者3名も加



ペンキ塗り作業を行う



2018年11月27日信濃毎日新聞の記事

わり、話は尽きない。23時過ぎには一人、二人と、宿泊場所（隊員室）へと移っていったが、最終組は25時頃まで飲んでいたとのこと。同窓会はいつも盛り上がるが、今回が常にも増して盛り上がった要因はやはり「ペンキ塗り」にあったようだ。久しぶりの手空き総員作業、それもしらせ甲板での。時間は容易に35年前に巻き戻っていた。また2年前（第5回目の同窓会を開かせてもらった時）に目にして衝撃を受けた錆の浮き出た甲板を少しでもきれいにしてあげられた、「しらせ」に恩返しが出来たという充実感もあった。

宴会の席で、やり残した場所を明日作業しよう、という話が出て、急遽翌日午前中 2 時間ほどかけてやり残した部分を完了させた。こうして 24 次の第 2 回目しらせペンキ塗りは無事終了した。なお、このペンキ塗りを共同通信の牧野記者(オブザーバーとして 24 次隊に参加した)が取材してくれ、記事は秋田県の魁や信濃毎日などの新聞に掲載された。

24 次隊は「ふじ」の最終航海で南極に行き、

越冬隊は「しらせ」の初航海で帰ってきました。しらせに恩返しできて良かったと思っています。隊員の平均年齢も 68 才とシルバー隊となっていますが、まだまだ恩返しペンキ塗りを続けたいと考えています。しらせにはまだまだ錆の浮き出た個所が多く残っていますし、2, 3 年で塗り直しが必要となるようです。

(24 次 大久保栄治)

26 次越冬隊の集い

—2018 年 9 月 松山（津和地島～道後温泉）にて—

2011 年より始まった 26 次越冬隊の一泊旅行は毎年続けられ、今回で 8 回目となります。毎回、幹事が趣向をこらした企画を立ててくれます。今回は鮎川幹事が生まれ育った松山市で、瀬戸内海のウニ、アワビがおいしい時期を選んで開催されました。参加者は福西越冬隊長、上田、奥平、神山、川久保、島本、堀川、山岸、神沢、古舘、前野、松村、若林、鮎川の 14 名でした。

9 月 1 日午後 2 時、松山市駅に集合した一行は、高浜港から高速船で津和地島に向かいました。ここ津和地島は江戸時代、当時の輸送の中心であった瀬戸内航路の風待ち港として栄え、参勤交代の殿様を接待する伊予藩公設の茶屋も置かれた由緒ある島でしたが、現在は人口 350 人。海産物と早生玉ねぎの名産地として知られています。津和地港から始まる海岸沿いの集落は、狭い道路を挟んで時代を感じさせる家々が建ち並んでいます。その中では新しい構えの亀川旅館に宿泊しました。

夕食会に先立ち、この 3 月に 65 歳で他界された越冬仲間の伊藤幸雄さんを偲び、黙祷と献杯を捧げました。食卓には、漁師でもある旅館のご主人が獲ってきた新鮮な鯛、サザエ、ウニ、近隣で養殖したアワビなどが並び、豪勢でした。宴たけなわの頃、各自から近況が報告されました。越冬した当時から 30 数年が経ち、定年退職者が大半を占めるようになりましたが、さすが元観測隊員。好奇心を失わず、いろいろな活動に意欲的に取り組んでいる人も多く、元気づけられました。

翌 2 日は晴天となり、津和地港から高浜港



楽しかった一泊を終え、津和地島の波止場に向かう 26 次隊一行

まで、緑なす島々の間を走り抜ける高速船の旅は快適でした。松山市駅から道後温泉までは路面電車。道後温泉の由緒ある本館の建物（重要文化財）は間もなく保存修理工事が始まり、完成は 7 年先とのこと。その工事前に本館で入浴できる幸運に恵まれました。入浴コースはいろいろありますが、私たちは「霊の湯二階席コース」を選びました。大理石を使った浴槽にゆったりつかり、入浴後は二階の休憩室で湯茶・お菓子を頂き、それから皇室用に作られた入浴施設を見学しました。

旅の締めくくりとなる昼食は大街道の名店、五志崑で「鯛そうめん」をいただきました。このように、松山の良さを堪能した 2 日間でした。幹事さん、ありがとう。南極基地で一年間をともにした仲間たちとの語らいは、いつも楽しい。皆が元気で、この集いがこれからも末長く続くことを願っています。

(26 次 山岸久雄)

恒例の 27 次会を開催

出航・越冬・帰国等を記念として周年行事として開いていた 27 次会ですが、毎年開催を確認していたので、12 月 8 日～9 日にかけて越後湯沢で開催しました。17 人の参加予定でしたが、都合で 2 人が不参加となり、15 人の参加でした。東京駅の 22 番線には出発 20 分前頃から新幹線組が集まり始め、いつも通り 10 分前には全員が集合しました。ホームの売店で飲み物を仕入れて早速いつもの車内宴会が始まりました。「MAX とき」は 2 階建て車両で、2 階の方が眺めが良いのですが、あえて 1 階の指定席としました。土曜日で混雑が予想されましたが、意外にお客さんが少なく、車内宴会は問題なく進みました。越後湯沢の駅から宿までは、散策を兼ねて歩く予定でしたが、あいにくの雨のため宿に迎えをお願いしアッという間に松泉閣花月に到着しました。宿には既に現地集合組が到着して 0 次会が始まっていました。宴会に備えていつもより量を控えてそれぞれに風呂を楽しみました。

宴会は予定時刻を 10 分早めて 17:50 から行いました。これは昨年から今回の 27 次会の間に川村さんと西尾さんが亡くなり、その状況をご存知の方から聞くためでした。5 月に亡くなった川村さんのことを黒水から伺いました。川村さんは亡くなる当日も元気に働いていましたが、突然の梗塞だったそうです。続いて 11 月に亡くなった西尾さんのことを大前さんから伺いました。大前さん以外にも 9 月の北海道地震の際に連絡を取った人がいて、それぞれにお元気なことを確認していたので、話を伺えば急なことでビックリでした。続いて内藤隊長の発声で献杯しました。宴会は 30 分の懇親後、恒例の一人一言（テーマは近況と 10 年後の私）があり、これまた恒例の



27 次参加者の皆さん

秋田弁を多用する方から行いました。こちらにもまたいつも通り「質問」の手が相次いで上がり大いに盛り上がりました。

2 次会は 302 号室で行いました。テーブルには各地の地酒・珍味が並びました。昭和基地同様それぞれのペースで好きな飲み物を味わいました。10 年ぶりに参加した人もいて、それぞれに越冬中のことや近況報告を話していました。寄る年波に勝てず予定より 1 時間早く 10 時過ぎにはお開きになりました。ただし、その後、青柳さん発案で外にラーメンを求めて繰り出した人がいました。いずれにしても以前と異なりその日のうちに休んだ人が大半でした。

翌日朝起きると雨が雪に変わっていました。宿の周りは雪が積もり前日とは全く違う世界が広がっていました。東京から 1 時間あまりの越後湯沢の前日と全く別な情景に正に「トンネルを抜けると・・・」を体験できました。時間の関係で付近の観光スポット訪問はできませんでしたが、「雪国」を味わうことができました。とにかく本当に楽しい 2 日間になりました。「場所は未定だがとにかく毎年開催」を確認してそれぞれ帰路につきました。

(27 次 萩無里)

第 30 次南極地域観測隊 30 周年記念の会

第 30 次南極地域観測隊 30 周年記念の会は、2018（平成 30）年 11 月 10 日に熱海温泉「ホテル貫一」にて行われた。江尻全機隊長（昭和越冬隊長）、竹内貞男副隊長（夏隊長）

を始めとして 27 名が参集し、参加は出来なかったが山下隊員（通信）は開会前に姿を見せてくれた。また召田成美副隊長（あすか越冬隊長）等 15 名からは、記念の会へのメッセ

ージを寄せて頂いた。

この日、11月10日の午前には、新しらせ5003が第60次観測に晴海埠頭を出航した。思えば30年前の1988(昭和63)年11月14日、第30次観測隊59名(昭和越冬29名、あすか越冬8名、夏隊17名、同行者5名)は南極へ向けて、しらせ5002とともに晴海埠頭を後にしたのであった。12月末にあすか隊と夏隊山地調査隊をセールロンダーネの麓へ送り、正月も無く昭和基地で夏作業に励んでいた1989年1月8日、朝食に起きた夏宿食堂のホワイトボードには「本日より平成」と艦の5分隊の食事当番によって書かれていた。平成30年で第30次隊は30周年となる所以である。

ホテル貫一、末広の間での会食に先立ち、故人(吉田次郎隊員(あすか・機械)2010年逝去、増田光男隊員(夏隊・建築)2012年逝去、谷崎政弘隊員(昭和・機械)2013年逝去)への黙祷を捧げた。首藤隊員(気象定常チーフ)の乾杯の音頭で宴は始まった。顔を合わせていると30年の時間のカーテンは無くなってしまいが、近況の報告を順々に聴いて行くと、起伏のある時間の経過を感じさせられる。改めてそのときの写真を観ると、やはり浦島太郎然としている者も多い。お互いに話すことは、昔の思い出より今、現在の身辺の話が多いようであった。半数近くは世の中の定年を迎える年

齢層で、それなりの労苦も伺われた。竹内夏隊長の締めでお開きとなり、大堀隊員(昭和・機械)の采配で記念写真を撮り終え、ほとんどが二次会に部屋を移した。相手も変わり話の種は尽きずに夜は更けていった。



30次隊参加者の皆さん

翌朝は皆、清々しい面持ちで朝食を終え、三々五々と名残惜しそうに帰途に就いたが、別れの挨拶は「又、何時か」であった。今回の出席者27名の内訳は、昭和越冬19名、あすか越冬2名、夏隊5名、および同行者1名であり、国外同行者(Norway 1名、中国2名)と物故者を考慮した参加は5割を越えていた。30年を経て半数以上が集まるというのは、驚いても良いのではなかろうか。どうやら35周年、40周年と、30次の集まりは続きそうである。

(30次 村上寛史)

新刊紹介

南極点一夢に挑み続けた男 村山雅美—
関谷敏隆 著
(ポプラ社 2018年12月発行
44頁 本体1600円+税)

南極関係では物珍しい本が出版された。『南極点一夢に挑み続けた男 村山雅美—』という関谷敏隆氏の絵本である。

関谷氏は、南極OB会会友であり、南極倶楽部の会員である。関谷氏は長年南極行きを希望され応募を続けた。

関谷氏は京都の大学で美術を学ばれ、絵本やイラストレーションを通して沢山の本を出



版された。そして、国内外で有名な賞をあまた得られている。最近では探検家をテーマとした『やまとゆきはら 白瀬南極探検隊』や

『まぼろしのデレン 間宮林蔵の北方探検』
『北加伊道 松浦武四郎もエゾ地探検』など著している。

ここで紹介する『南極点一夢に挑みつづけた男 村山雅美』は、南極の景色や生活、観測状況はもとより、南極観測隊の1次隊から9次隊までの観測の活躍を追い、9次隊の南極観測旅行に焦点が絞られるように描かれている。もちろん、微に入り細にいたるところは読者の想像を駆り立てるように素晴らしい絵が挿入される。オーロラやどこまでも広がる雪原などの絵は迫力があり、夢を広げるのに

十分である。

子供たちがこの絵本を通して、南極への理解やあこがれを持ち、次の時代を切り開いていくためのあこがれや思いにつながってくれることを作者は願っており、紹介者も願って止まない。

なお、この絵本に使われた絵の原画展が、今年1月26日～2月28日名古屋海洋博物館、3月15日～5月31日国立極地研究所(立川)、6月半ば～3か月にわたって稚内市内の図書館で行われる予定。(福谷 博)

犬ぞり探検家が見た! ふしぎな北極のせかい

山崎哲秀 著

(repicbook (リピックブック) 2018年10月発行

160頁 1080円(税込))

著者の山崎哲秀氏は高校時代に冒険家の植村直己にあこがれ、20歳の時には彼の足跡を辿るようにアマゾン川のイカダ下りを成功させた。続いてグリーンランド縦断を夢見て北極に渡るが、想像を超える北極の自然に手も足も出ずに失敗した。その後、北極を知るためにイヌイトに弟子入りし、30歳の時に始めた犬ぞりを使った活動が、北極の自然や歴史、暮らしを紹介する本書に繋がっている。

「小学生の子どもたちでも楽しめる北極の本を書いてみたいと常々思っていた」という著者の強い思いが形となった豊富な写真とイラストを使い、平易な言葉で書かれた内容は子どもたちだけではなく、大人でも十分に楽しめる。

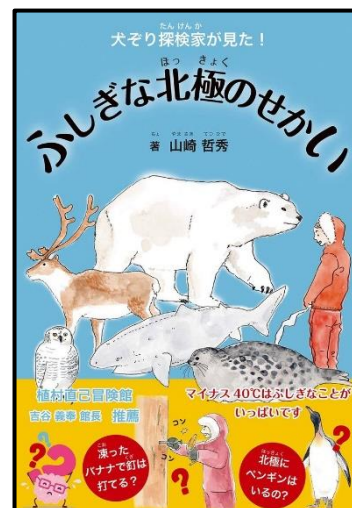
1章の「北極と南極の違い」から9章の「北極の歴史と昔の暮らし」まで、独立した章立てで、好きなところから読める構成になっている。いずれの章も筆者の30年に渡る北極での実体験に基づいたもので、読者が持つ素

朴な疑問に答える形で書かれた内容は北極のイメージを広げてくれる。各ページの下部に書かれた「質問と答え」はクイズ好きな子どもたちには嬉しいアイデアで、北極への

の興味がより深まることだろう。

巻末の「犬ぞり探検家のこと」では北極での活動に対するモチベーションが語られ、さらに著者の良き理解者である伴侶との南極での劇的な出会いから結婚に至るまでのくだりは、著者の人となりが良く表れていて微笑ましい。

年齢を問わず、北極に興味のある多くの人に一読を進めたい。(小林正幸)



50周年を迎えた第9次隊のアーカイブ資料の紹介(その2)

前回の会報に引き続き、第9次隊のアーカイブについて紹介します。

今回は、第9次隊越冬隊員として参加された大久保嘉明氏(医学担当・東京医科歯科大学)から寄贈していただいたアーカイブ資料です。

大久保氏は、生物担当の福井隊員とともにラングホブデ海岸において日本の南極観測隊で初

めての潜水調査を行いました。

この時に大久保氏が使用した潜水具の一部が今回寄贈いただいたものです。

受け入れは随時行っておりますので、南極OB会にお気軽にご相談ください。なお、受け入れた資料につきましては、本会報にて報告させていただきます。

野元堀隆（南極 OB 会アーカイブ担当）



潜水調査中の写真（右が大久保氏）



潜水具が入った収納袋



救命ジャケット



足フィン（表と裏）



鉛製ウェイトベルト（14kg）



ダイバーナイフ

訃報 ご遺族や会員の方からお知らせ頂きました。謹んでお悔やみ申し上げます。

（敬称略）

お名前	隊次	部門	逝去月	享年	お名前	隊次	部門	逝去月	享年
齊藤文一	05s	地球物理	H29.10	92	川村直司	27w, 44w	航空	H30.5	66
氣賀澤實	宗谷 4 次	航海士	H30.8	86	浅見正雄	21s, 29s	地質	H30.5	73
竹内彦伍	宗谷 4 次	甲板員	H28.11	78	矢内桂三	9w, 15w, 20w, 29w	地学	H30.12	77
大瀬正美	1s, 2s, 3s, 4w, 7s, 8w, 12w, 19s	電離層	H30.11	94	作間敏夫	1w	通信	H30.12	92
西尾文彦	17w, 23w, 27w, 43s	雪氷	H30.11	73	小玉正弘	1s, 2s, 6s	宇宙線	H30.12	93
金山金良	15w	調理	H30.10	73	勝部領樹	20s(obs)	NHK	H30.12	88

第 28 回「南極の歴史」講話会のご案内

2019 年 3 月 9 日（土）14：00～16：00（受付 13：30）に「南極観測 60 周年記念講演：越冬生活で語る南極観測 60 年（Ⅲ）」を開催予定です。詳しくは同封の案内で。

*** 広報委員会からのお知らせ ***

○通信費納入のお願い

今年度最後の会報を皆さまにお届けします。2018 年度通信費をまだ納入していない方は同封の振込用紙で振り込みをお願いします。

南極OB会事務局 〒101-0065 東京都千代田区西神田 2-3-2 牧ビル 301

電話：03-5210-2252 FAX：03-5275-1635

メール：nankyoku-ob@mbp.nifty.com

郵便振込：加入者名 南極OB会 00110-1-428672

南極OB会ホームページ：<http://www.jare.org/>
